

琴線 全歌

森野 水琴

令和五年 二〇二三年十一月
青み増す 薄紫に 祈りつつ
時の女神よ 逢わせたまはむ

令和五年 二〇二三年十一月
赤み増す 薄紫に 色づきて
逢いし喜び 心に沁みる

令和四年 二〇二二年十一月
秋の夜を しおり片手に ほほえみて
ふみ読まむかな 果てるともなく

令和五年 二〇二三年十二月
あさぼらけ そよ吹く風に 揺れながら
舞い続けるや 草の白露

令和四年 二〇二二年六月
暑き日に よみがえるのは 伊予の味
懐かしみつつ 心なごまむ

令和五年 二〇二三年七月

雨あがり 眺むる空に かかる虹
さだめの道を ともに歩まむ

令和四年 二〇二二年四月

雨の音 窓越しに聞く 夕暮れに
明日は晴れよと ひとり祈らむ

令和六年 二〇二四年六月

雨の音 止みて明けたる 空見れば
虹の架け橋 光り輝く

令和五年 二〇二三年九月

生き急ぐ なかれと風に 教えられ
力をために しばし休まむ

令和六年 二〇二四年七月

いくたびも 体に傷を 受けるとも
心磨いて 立ち直るらむ

令和四年 二〇二二年三月

異国へと 窓を開きて 聞きながら
はるか遠くに 想い寄せなむ

令和四年 二〇二二年一月
いてつく空に 陽が射して 暖かくなり
はずむ言の葉

令和四年 二〇二二年六月
美しき 文字で書かれた 知識ゆえ
真似て書いては 渴き潤す

令和四年 二〇二二年三月
美しきもの 美しいと言う あなたこそ 美しい
それが分かる 私もまた 美しい
それだからこそ 私たちは 美しい
この輪広げて 皆美しき 世になることを
ひたすら願う

令和四年 二〇二二年八月
美しく したためられた 言の葉を
書き写しては 沁みさせむ

令和四年 二〇二二年十月
海へだて 異国の島を 眺めれば
間近にせまる 恐れにも似て

令和五年 二〇二三年九月
うららかに ひざしを浴びて 咲き誇る
秋の桜が 微笑み揺らぐ

令和五年 二〇二三年四月
おだやかな 春の光に 揺れながら
鳥の巣立ちを 見て微笑まむ

令和七年 二〇二五年三月
おだやかな 日ざしを浴びて 咲く花の
ほほえみを見て 心なごまむ

令和五年 二〇二三年二月
降りてきた 人の言の葉 聞きながら
忘れた響き 想い出さなむ

令和五年 二〇二三年二月
おん前で 友と舞いたり あてやかに
天も喜び ひとすじの雨

令和六年 二〇二四年九月
風薫る きんもくせいを 運びつつ
実りの秋を 知らしめるらむ

令和六年 二〇二四年六月
風薫る そよぐ言の葉 ことほげば
ほほえみながら 心和まむ

令和六年 二〇二四年十月
風薫る 友を天へと いざないて
残れる人を 我は育てむ

令和六年 二〇二四年七月
風薫る 花の都に あてやかな
競いし者の 夢叶うらむ

令和六年 二〇二四年三月
風薫る 春の訪れ 愛でながら
あふれる想い したためるらむ

令和四年 二〇二二年十月
風に舞う 波の華こそ 咲き誇れ
つかの間にとは 思わぬほどに

令和六年 二〇二四年十一月
倉の戸を 開けてまばゆい 光浴び
見上げる空に 虹の架け橋

令和四年 二〇二二年十一月
声出さず 言の葉のみを 響かせて
聞こえるがまま ただしたためむ

令和四年 二〇二三年四月
心こめ したためてこそ 美しい
文字に寄り添い 更けていく夜

令和四年 二〇二三年一月
言の葉が 天から降りて くるように
すらすらと ただ すらすらと したためむ

令和六年 二〇二四年九月
言の葉に 月の光が ほほえみて
内から磨く 光とならむ

令和六年 二〇二四年十一月
言の葉に 月の光を 受けながら
つどいし者が ふみ したためむ

令和五年 二〇二三年九月
言の葉の 続きをいつも 待つ友に
降りてきたりと すぐに届けむ

令和四年 二〇二二年三月
この雨は 天と心を 結ぶ水
渴き潤し よみがえらせむ

令和六年 二〇二四年一月十九日
このごろは 人の心も 和らぎて
ともに遊ばむ 時のまにまに

令和七年 二〇二五年二月
この花を 守りたいとて 通う日々
また来る春も 咲き誇らせむ

令和六年 二〇二四年四月
咲くまでの 期待ふくらむ つぼみ見て
今か今かと 日も暮れるらむ

令和六年 二〇二四年十月
さてもこの 神無月に 天に召される 人の残した
恵みをみなで 育みたまえ

令和四年 二〇二二年二月
さても この 弥生の美空に
仲睦まじき ふたりの 今日はお披露目
願わくは とこしえに 互いの魅力を
心いくまで 引き出し給え

令和四年 二〇二二年八月

したためた ふみのゆらぎに なごみつつ
そこはかとなく 夜も更けなむ

令和四年 二〇二二年一月

白い紙 黒い文字 無限の世界 したためむ

令和四年 二〇二二年一月

澄み渡る 夜空に光る 月見れば
我が心にも 沁みる言の葉

令和七年 二〇二五年三月

そよ風が 運ぶ調べに 耳を立て
より生き生きと はずむ心よ

令和四年 二〇二二年二月

そよぐ風 木の葉を奏で 揺れながら
ささやくように 耳を潤す

令和六年 二〇二四年七月

たおやかに さらに和らぐ 言の葉が
今ひとたびと 包み込むかな

令和五年 二〇二三年二月

手のひらに ひとひらの雪 舞い降りて
さもひそやかに ささやきかけむ

令和四年 二〇二二年八月

天から降りた 言の葉を したためて
声に出しては 天に届けむ

令和四年 二〇二二年八月

天に祈る 言の葉が舞い 羽衣を
まとう天女も ほほえみ行かむ

令和四年 二〇二二年三月

天も泣き ひとすじの雨 舞い降りて
心の泉 琴を奏でむ

令和七年 二〇二五年一月二十二日

初めに詠みし歌

時を越え 天にも届く 言の葉は
晴れやかなりと 夢に見るらむ

令和七年 二〇二五年一月二十二日

えいしんか
詠進歌

時を越え 天まで届け 言の葉よ
睦月の美空 夢叶いたり

令和四年 二〇二二年六月

懐かしき 器に蒸した きょうの品
我を忘れて 味わうほどに

令和四年 二〇二二年三月

夏までの 樂しみとせよ 伊予の味
暖かき汁 知る人ぞ知る

令和四年 二〇二二年二月

名も知れず 流れる川の せせらぎに
耳を傾け しばし たたずむ

令和七年 二〇二五年五月

二年ぶり 神田の神輿 みこし 担ぎ見る かつ

乙女の涙 心を洗う

令和六年 二〇二四年三月
庭見れば 花咲き誇り あげは舞う
のどけき日々に 心和まむ

令和五年 二〇二三年五月
激しかる 雨降りしきる 音を聞き
静かに響く 琴を待つらむ

令和四年 二〇二二年四月
美と書いた つもりが何故か いまひとつ
線が足りずに なおも励まむ

令和七年 二〇二五年二月
人知れず 咲く花を愛で 和む時
また逢いたしと 思う心よ

令和四年 二〇二二年一月
人しれず 眺めしままと 気がつきて
心の窓に ささやきかけむ

令和五年 二〇二三年三月
ひと冬を なごりおしみて 降る雪も
巢立ちをめでて 花となるらむ

令和四年 二〇二三年十二月
響く音 したためた本 読みながら
しおり握りて ゆらぐ心を

令和六年 二〇二四年十二月
星に向け 贈るまなざし 和みつつ
人を励まし はぐくむ心

令和五年 二〇二三年四月
舞い降りる 桜吹雪に 身をまかせ
輝く道を 友と歩まむ

令和四年 二〇二三年三月
また一つ 異国の人の 言の葉を
学び始めて ともに励まむ

令和六年 二〇二四年十一月
待ち焦がれ 訪ねし海は 夕暮れの
赤と黒とに 波が泣くらむ

令和四年 二〇二二年四月
待ち焦がれ 夏まで待てぬ 伊予の味
満たしたあとの 茶と楽しまむ

令和五年 二〇二三年五月

待ちわびた 祭り賑わい 華やかに
初顔合わせ 友となるらむ

令和四年 二〇二二年八月

窓に射す 陽のまばゆさに ときめいて
新たな朝を きょうも迎えむ

令和五年 二〇二三年十二月

窓の雪 そこはかとなく 降りつもる
しおり片手に 響き聞くらむ

令和四年 二〇二二年十一月

窓辺にと 寄り添う人の 面影に
懐かしみては 秋も暮れなむ

令和四年 二〇二二年八月

窓を打つ 雨の音にも 驚きて
まだ明け初めぬ 空を眺めむ

令和六年 二〇二四年七月

見上げれば またたく星の かなたより
贈られしもの 心に沁みる

令和五年 二〇二三年四月
見渡せば 満開の花 咲き誇り
人の心も 桜に染めむ

令和五年 二〇二三年一月十八日
巡りあい 久方ぶりの 喜びに
妙なる調べ 友と聞くらむ

令和五年 二〇二三年七月
森にあり 野にもありなむ 水の琴
天高くまで 奏でられたし

令和五年 二〇二三年十二月
やまと歌 文と音とを 友として
琴の葉奏で 文の花咲く

令和六年 二〇二四年九月
やまとうた 森にも野にも ひびかせて
水がかなでる 琴となりけり

令和四年 二〇二二年十月
やわらかき 筆の運びに 酔いながら
したためていく 時のまにまに

令和六年 二〇二四年四月

夜がふけて 風がささやく 言の葉に
月の光が 降りてくるかな

令和四年 二〇二二年一月

夜もふけて 耳そばだてる 静けさに
雪の白さも 窓に映らむ

令和七年 二〇二五年五月

わが文を ふみ 読む声を聞き 微笑みて
さらに続きを したためるかな

令和五年 二〇二三年三月

別れても 互いの幸を 祈りつつ
また逢わむとぞ 友に誓はむ